


活動タイトル	発達障がい児の保護者がウェブ動画で療育手法を学ぶサービスを構築	団体名	NPO法人ADDS	
<p><b>1年間の活動 (アウトプット)の目 標 (事業全体)</b></p>	<p>&lt;サービス開発のための当事者ヒアリング&gt; サービスのコンテンツを開発の参考にすべく、当事者の親の会にヒアリングを実施。 &lt;サービスのコンテンツ制作&gt; ABAに基づいた療育手法に関する動画を、以下構成で20本制作。 (1)子どもへの働きかけ方の基本：6本制作済。追加で5本制作。 (2)子どもの困りごとや問題行動への対処方法：新規で5本制作 (3)子どもの特性（自閉傾向・ADHD傾向等）に合わせて学ぶ、「できない」が「できる」ようになるための働きかけ：34本制作済。追加で10本制作。 &lt;サービスのシステム構築&gt; 上記で作成したコンテンツを格納するWEBサービスの構築。</p>		<p><b>■ 活動風景</b></p>	
<p style="text-align: center;"><b>■ 活動報告</b></p> <p><b>2018年9～11月</b> サービスのコンテンツを開発の参考にすべく、既存のweb動画教材を利用した家庭にアンケートを実施。・・・①</p> <p><b>2018年12～2019年2月</b> 動画作成会社との打ち合わせ。動画の本数とスケジュールを決定。</p> <p><b>2019年3月～4月</b> シナリオ・台本作成と、動画の撮影。広報スタート。・・・②、③ (1)問題行動への対処方法とうまくいかないときの対応：新規で2本制作 (2)課題編：新規で17本制作 (3)子どもの特性に合わせて課題を選べるようコース分けし、コンテンツを格納</p> <p><b>2019年5月～6月</b> モニター参加者20名決定。20件全てに事前のヒアリングとアンケートを実施。</p> <p><b>2019年6～8月</b> 月に1回の電話ヒアリング（およそ10件程度）</p> <p><b>2019年7月</b> 事業者向けに広報。アカウントの発行・・・④</p> <p><b>2019年8月</b> 座談会の開催</p>	<p style="text-align: center;"><b>■ 1年間の目標に対する達成状況</b></p> <p>①19名から回答を得た。家庭療育を実践する障壁として「教材を準備することが大変」「きょうだい児がいるので時間がとれない」「何を教えてよいかわからない」という回答が多かった。</p> <p>②当初予定していた本数に近い19本の動画を作成</p> <p>③当初目標としていたモニター参加者20名が1か月半程度で到達</p> <p>④事業所向けについては、弊法人に一度問い合わせをくれた事業所に連絡することで、当初目標としてた人数10名を上回る25名に動画を視聴してもらうことができた。</p>	<p>動画の一例</p>		
<p style="text-align: center;"><b>■ 1年間の活動のまとめ</b></p> <p>保護者向けの動画サービスについてのモニター企画は今回で2回目であるが、今回の方がコースを分けることで課題編についても「ちょうどよかった」と回答する家庭が11名中8名で、前回の企画時よりも多かった。一方継続という視点においては、きょうだい児が多いう家庭や職種（正職員か専業主婦かなど）によっては難しいと推測されるが、コンテンツを格納しているアプリケーションの動画視聴歴は、14/20人と7割が基礎編については視聴を全て完了しているとの結果が出ている。</p> <p>また、ヒアリングやアンケートには未提出だが座談会には参加した家庭もあったため、実際に動画を視聴して実践している家庭はリアクションのあった約10名程度よりは少し多いと考えられることから、多くの人に届き、変化を与えられるツールであると考えられるが、運用や伴走の方法については再検討が必要である。</p> <p>一方、事業所の職員向けについては、当初期待している以上の反響やニーズがあったことから、コンテンツを充実させていくことも今後の検討事項である。</p>	<p style="text-align: center;"><b>■ 事業を通じて得られたノウハウ</b></p> <p>日頃行っている支援について、支援者以外の動画コンテンツやwebコンテンツに関わる第三者と一緒に作成することで、どのように表現したり、動作すること、テロップや動画の構成をすることが初めての人にとって伝わりやすいかを考えることができたことは、今後保護者や支援者などへの研修にも活かせるノウハウである。</p> <p>また、普段からe-learningを用いた支援者向けの研修を開発しているが、今回の動画のようなライトな形の教材についてもニーズが多くあることが分かったため、グラデーションのある支援者育成ツールの開発をすすめていきたい。</p>	<p style="text-align: center;"><b>■ 実施した人材育成策</b></p> <p>電話でのヒアリングについて、聞き取り内容や項目を整理し、今後マニュアルの作成に活かしていきたい。</p>	<p style="text-align: center;"><b>■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）</b></p>	
<p>この1年間の活動を通じて</p>		<p>発達障がいの子どもへの関わり方を保護者や支援者などへの遠隔支援サービスのモデルの構築を達成しました。</p>		
<p style="text-align: center;"><b>■ 受益者の変化（効果測定結果等）</b></p> <p>①保護者：回答者10人中9名子どもへの働きかけに関するセルフエフィカシー得点が事前事後で上昇した。</p> <p>②保護者：回答者10人中全ての人々が今後今の療育機関のみではなく、ABAの療育機関や家庭療育をサポートする機関にアプローチするという回答が得られた。また療育的な関わりが10人中6名が週に5～7日10～30分またはそれ以上取り組んでいるという結果が得られた。10人中3名が週に2～4日10～30分程度取り組んでいるという結果が得られた。</p> <p>③保護者：「たたく」といった行動が保護者の加入により、「もう一回」と言えるようになった。遊びたいものを遊んでほしい人のところに持って行って「えほんよんで」「ぶらんこして」など言えるようになり、コミュニケーションがスムーズになった。などのエピソードが得られた</p> <p>④支援者：「内容が難しく理解できない部分があった」は1人、9人が「具体的な療育課題の実践の仕方が分かった」と回答。</p> <p>⑤支援者：実際に療育課題を実施したのが4人、今後どのように実施するか検討しているのが3人、子どもとの関わり方を見直しているのが1人とほぼ全ての施設に前進の動きがみられる。</p>				